

---

# 今宵も鬼は泣く

一覚流

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

今宵も鬼は泣く

### 【Nコード】

N9545Z

### 【作者名】

一覚流

### 【あらすじ】

仕事や欲望にまみれ、彼は諦めたくない物を諦めざるを得ない。。。

「ふう……。」その男はため息に似た息を出した。

その男は自分の部屋と思われる部屋を見回した。

ビルの25階ぐらいの所にある殺風景な部屋。フローリング、白い壁、しかしその中にも

非日常的なものが混じっている

人間に限りなく同じような人形、そして真っ白な棺。その男は夕日に向かって立ち上がった。

その男の外見も異様の一言である。真っ黒なローブ、真っ黒なフード、その男は立ち上がり言った。

「……。仕事の時間だ……。」と

その直後その男の持っている二つ折りの携帯電話に電話が来た。その携帯電話ですら黒い。

その男はまるで風の流れを言い表すような口ぶりで言った。

「……。ハイこちら燐斬異常問題解決所です。」少し会話をした後その男、霊斬は自分の部屋を後にした。

\*

\*

「最近部屋に物音が絶えないんですが。」と裕福そうな男が霊斬に語りかけた。

「なにか異常な事でなければいいのですがねえ。」と男は続ける。

「……。その部屋に人はいるんですか？」燐斬が言ったと同時にその男は葉巻に火をつけて

「いやいやあその部屋に私の家の使用人は入らした事がありませ

んよ。」とその男はガラス製の灰皿を寄せて葉巻を1、2回叩いた  
「・・・わかりました。調査しましょう。」と言うと同時に靈斬は  
立ち上がりその部屋への歩を進めた。

\*

\*

「ここです」その男は嚴重に札が張つてある扉を開けた。  
その中には札や陣や黒魔術的なものまで置いてある。

「・・・。」しかし燐斬はそんなものは見向きもせず白い手袋をつ  
けた。そこにはどの本にも載つてない陣が書かれていた

「なにをするんですか？」とその男が言った途端、燐斬は何もない  
空間を殴りつけた。その攻撃は青い閃光とともに消え去った

「！」男は驚いた顔を隠せずにいた。燐斬が吹き飛ばしたと思われ  
る空間には煙が立っている。

燐斬は懷からカードのようなものを出してその空間に飛ばした。す  
るとカードはその空間で止まり、緑色の淡い光とともに  
床に落ちた。

「・・・終わりました・・・。」燐斬はそのカードを拾いながら男  
に話した。男は戸惑いながらも答えた

「あ・・・ああご苦労さま・・・。」そして燐斬は「・・・それでは  
・・・。」と言つて帰ろうとしたが

「待つてくれ！」と男が言った、男は続けて

「今のは幽霊やそうゆう物なのかね？」と、燐斬は言った「・・・  
ちがいます・・・。」続けて

「・・・今のは人間の無念や罪、言霊などが集まつて構成された、  
『燐』です。幽霊などの方が格段に上・・・いやそもそもが違いま  
すから・・・。」

男はしきりに首を傾げてる。「……では……。」燐斬はその男の家を出ようとする。しかしまた男が呼び止めて言う。  
「お金はいらないのかい！」としかし燐斬は「……私は食うには困ってませんから……。」と喋ってその男の家を出た。

\*

\*

燐斬は自分の部屋に帰って一息つき、そして立ち上がり、人形の所まで歩く。

「……ここからが大仕事……。」と呟き、燐斬は先ほどのカードを人形に差し込んだ。

そのカードは折れずにまるで水の中に入れたかのように吸い込まれてゆく。

人形は一瞬青白い光を出したと思うと、次は小刻みに震えている。

燐斬はその人形を抱えて、白い棺に入れた。

そして燐斬は言う。

「……思い出せ……数多のモノが混ざり合った<sup>るつぽ</sup>坩堝から自らの形を……思い出せ……！」

そして白い棺は色を変えてゆく。純白から少しくすんだ赤に、途端、真つ赤な光のように輝き、そして棺は消えてなくなった。

燐斬は言った「……あとはどう動くのか……だ。」そして燐斬は自分の椅子に座って。息を潜めるように静かに眠った。

\*

\*

そして後日、燐斬は新聞を見た。すると一面の端のほうにこの前の男が何者かによって暴行を受けたという事件があった。

その記事を読み終わり。新聞を机に置くと、燐斬の部屋の扉が勢い良く開かれた。

そこには半裸の男が立っていた。燐斬は「・・・来たか・・・。」と呟くだけだ。その男は右わき腹に傷を負っていた。

「なあ、先生、この、身体を、変えてくれよお、昨日のようにさあ！！」その男は続けて「もう少しで、復讐が、叶うんだよお！！」と言う。しかし燐斬は無言のまま白い手袋をはめてその男の前に立った。そして燐斬は言った。

「無理」その声は今までのゆっくりとしてしゃべり方ではなかった。キツパリと現実を諭すように言う。

すると男が「無理？ムリ？むり？アハハアハハハッハハアッハハハ！！ふざけんなっ！！」と言いながら燐斬に殴りかかった。

燐斬は皮一枚で回避して男、いやこの前の人形のこめかみに渾身の一撃を与えた。するとその身体は青く燃え出した。

その男は苦しそうにのた打ち回り燐斬へ向けて声にならない声でこっ言った。

「なんで・・・なんで・・・もうすぐ人間になれたのに・・・畜生、ちくしょう、チク・・・シヨウ・・・」

程なくしてその身体からは灰すらも残らずに消えてしまった。

「・・・お前の核は創られ、そしてあるべき所に今戻った。この夕日はお前への慰めかもな・・・。」

そういつて燐斬は夕日に身体をむけ呟いた。

「・・・仕事なんだよ・・・。」

その赤い鬼のような目が、今日の夕日のように淡く、悲しく揺れていた。

完

(後書き)

ドモ、おはこんばんは

えっ、と今回の読みきりは如何でしょうか？反響の声が聞こえそうですっ！さん、はい！

[illegible]

がつくり……（あんまり聞こえなかったから落ち込んでいる）

つづかない話ですが。この話はふと私が思い浮かんだものでして  
かけなかったり、苦しんだりしましたがまさに

れつかの如く燃える一過性のやる気で

たちなおって、暇をみてゲーム……じゃなくて書いてって

ようやく完成したときには薄い疲れは吹き飛びました。

未熟者ですが読んでいただきありがとうございました。

P  
S

このあとがきに含まれている文字、見つけられるかな？

LV3ぐらいだな・・・うん。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9545z/>

---

今宵も鬼は泣く

2011年12月29日21時45分発行